

十三参りと電電宮

十三参りは決まった季節に行われる成人儀礼で、13歳に成った子供たちが法輪寺を訪れ、虚空蔵菩薩に知恵を授けていただくように祈願する。最初にこの儀式が行われた記録は残されていないが、平安時代（794-1185）の清和天皇（850-880）が13歳になった際にこの寺を訪れて知恵授けの祈願を行ったと信じられている。この時代、子供は13年で一回りする干支が一周すると大人になると考えられていた。祈願の儀式に参加した子供は家に帰る途中の渡月橋で寺を振り返ってしまうと、菩薩に授かった知恵が全て元に戻ってしまうと言われている。

電電宮は道昌（798-875）が800年代に明けの明星（明けの明星）を祀った明星社が元となっている。道昌は明けの明星が雷などの自然現象の神である虚空蔵菩薩の顕現だと信じ、明星社は1864年に焼失するまで奉祀されていた。その後この場所には仮宮が置かれ、1956年に勃興してきた電気通信関連産業で働く人々の祈りの場所として再建された。その際に電気を意味する電を二つ重ねた電電という名前が新たに加えられた。今日世界中の技術系企業からの参拝者を迎えている。